

俳句雑誌

空



2019・6・7

SORA 85号

空

令和元年7月31日発行

第17巻3号

通巻第85号

福岡 山内 碧

寒鴉王の古墳の上歩く
風花とつぶやけばはや消えにけり
竜宮へ流れつきたる雛かな
手を上げて児が追ひかくるしやぼん玉
しやぼん玉の中に入つて浮かびたし

福岡 田代 貞香

土間いままも裸電球山眠る
鶯の声に隣家も窓ひらく
暁や鳥の声待つ枝垂梅
吹かれある鳥の胸毛や五月来る
春浅し子供の声が土管より

長崎 仲里 奈央

草青むかけがへのなき友のゐて
妹の欲しとせがむ子水ぬるむ
六歳と厨に立てる雛祭
初桜泣くのは一度きりとする
うららかや祖母の一日長くなり

東京 山田 正子

凍て滝に生きてゐる水見付けたり
年の豆ざしきわらしが数へをり
春曙書き直したき文のあり
黒板の日直消して卒業す
少年とも少女とも見えヒヤシンス

福岡 あさなが捷

出来ますと即答したる新社員
宣言の右手夏雲突き抜けし
宿題は食卓でする夏休み
自転車の立ち漕ぎ夏の雲に入る
夕涼や何みても笑む赤ん坊

福岡 秋津 令

寝に帰るのみの栖よ春一番
猫の子にからまれてゐる厨かな
子雀の羽搏きけふも怠らず
菖蒲湯や十かぞへをる母の声
変はりゆく町並ばかり夏燕

直方 吉田悦子

すいすいと禁猟池の真鴨かな
曖昧に生きてはゆけぬ寒椿
毛糸編む利き手は左母に似て
生意気な弟よりの初電話
家を出ぬ母に花びら餅を買ふ

大阪 井上和子

緒方洪庵適塾
風光る書物広ぐる洪庵像
適塾の蘭和辞典や春ゆけり
春愁や適塾柱の刀疵
適塾の暮らし一畳春夕焼
鶏の影我が影伸ぶる四温かな

直方 曾根富久恵

寝転べば猫の寄りくる四温かな
豆撒きの嫗ぶかぶかの袴
床の間に寝かせてありぬ紙雛
春一番過ぎて明るくなりにつけり
春昼や赤子よく泣く新幹線

北九州 河原敬子

白梅に立てかけてある宮箒
高きより剪定の屑飛び来たる
記念樹の太るふるさと鳥雲に
はくれんの苔や瘤をちからとし
竹やぶはいま囀りのるつぼなり

大阪 田岡千章

買ひ食ひのコロッケはふはふ春隣
立春や老医の赤き聴診器
ターコイズブルーのピアス春来たる
早春の窓マネキンが手招きす
露の臺川に行きつく廢線路

兵庫 大西乃子

浅春や鴉は白き糞落し
神仏に侍むくらしや梅真白
海からの風やはらかき春彼岸
花こぶし乳歯が一つ生えにつけり
朧夜の白蛇のごとき波頭

兵庫 青木朋子

山裾に沿ひし家並み寒明くる
可視光線不可視光線山芽吹く
犬三匹さばくりードや草萌ゆる
春の雨例に読み入る古語辞典
新緑や眉宇締め弓を引き絞る

東京 遠山のり子

寒椿葉の数ほどに花の数
枝先に光集めて冬木の芽
春泥を軽く飛び越すランドセル
永き日や古木の樹齡推し測り
参道の松の影濃き日永かな

神奈川 窪みち子

春浅し固く帆たたむ日本丸
船着場は秩父青石水ぬるむ
津波あと春星潤み音もなし
春星やいよいよ高き防潮堤
山羊の列春夕焼の中歩む

京都 天谷翔子

佐保姫の息か項にかかりしは
箱の蓋取ればささめきやむ雛
目覚むれば我涅槃図の中をり
春日傘くるくる思ひ出し笑ひ
蛇穴を出でももいろの舌見する

・ 第八回 「空新人賞」 受賞作品 ・

仲里 奈央



三十歳を目前にして、頃、地元の長崎で行われていた松尾龍之介先生の句会に誘われ、軽い気持ちで参加しました。たったその一回の句会で十七文字の世界に魅了され、その日のうちに本屋へ駆け込み、歳時記を買った。鮮明に思い出します。松尾先生の下で学ばせていただき、御縁をいただき、「空」の柴田主宰に師事し、荒井千佐代先生の句会にも参加させていただきました。育兒と仕事に追われ、思うように句会に参加出来なかつたり、詠む時間すら持てない時期もありましたが、これまで続けて来られたのは、三人の先生のお蔭だと感謝しております。

この度は新人賞をいただき、ありがとうございます。まだまだ勉強不足ではありますが、この賞を励みとして、少しでも良い句が作れるよう精進していきたいと思えます。

夏の雨過ぎたる森の息づかひ

点すならば点滴よりも苔清水

想ひ出は軽し洗ひ髪は重し

朝蟬やまだ誰も居ぬ更衣室

コスモスはそれでそれだと聞いてくる

虫の音に悪阻おさまる一時よ

綿虫のほどの愛なら持ち合はず

逢へぬならそれまでのこと花吹雪

木蓮や臨月の腹はちきれむ

胎の児の独り遊びや冬籠り

母となる日の近づきて燕来る

雛祭薄くなりたる蒙古斑

足下にまとはりつく子はこべ咲く

をさな児の裸天使のかたちして

鶏頭は泣き止まぬ子の味方かな

一滴も子に触れさせぬ冬の雨

ふらここの軋む重さになりにつけり

花見ならジャングルジムのてっぺんで

木蓮や時に子宮に戻したく

蒲公英の絮をさな児を待つてゐる

ほうたるを来世も共に見たき人

反り合はぬをんなとをんな放屁虫

言はぬゆゑ伝はることも水引草

母といふ息苦しきよ鴟の声

小声なら言へる気がする螢草

六歳が新聞広ぐ一葉忌

夫といふ他人と暮らし炬燵出す

凝る肩をぐるりと回すクリスマス

白魚の嘘一つなき躰かな

桜薬降る迷惑なほど愛す

空集抄
柴田佐知子抽出

水を得て自由となれる流し雛

高倉和子

曲名と同じ苗札ハミングス

中田みなみ

春の靴スキップするかに飾らるる

岸洋子

にはとりに鱗の脚や春隣

深川淑枝

影落とし声落としつつ鶴帰る

松田明子

しばらくは椿でゐたき落椿

山田正子

雲雀野やバスより降ろす杖の束

戸栗末廣

神棚に供へて乾く桜鯛

坂口晴子

龍の玉籠むれば無敵竹鉄砲

角野良生



出席簿楯のごと持ち新教師

あたたかや猿の座れる座禪石

眠さうなキリンの首や花ミモザ

春を待つ片肺のみの母の息

いささかは野鼠の糧芋植うる

とぼしりの顔までかかる義仲忌

涅槃図に入りたきもの集ひたる

鬼は外幸せさうな声上がる

題の出で静まる句会涼新た

垂直に海へ落ちゆく紅椿

春光を両手に拡げ太極拳

股引の片足上げて干されをり

山内 碧

河原 敬子

横田 敬子

小島 翠波

原 友子

吉田 菫

山本 則男

大西 乃子

あさなが捷

石橋 幾代

永淵 恵子

田中とし江

麦の秋自転車日和となりにけり

一日かけ開ききつたる牡丹かな

点滴の管の一部となり寒し

永き日や塩をほぐして塩壺に

福の豆数日かけて食べにけり

盥ほど空地のあらば茄子植ゑむ

菜種梅雨一人といふは眠きこと

棒切れを定規に仕立て薯植うる

歎異抄閉ぢて日永をもてあます

力込め振つて一の目絵双六

諍ひのそもそもは何山笑ふ

薄氷をのぞけば顔の割れてをり

苑 実 耶

小林 朱 夏

織 田 高 暢

曾 根 富 久 恵

森 田 明 成

古 賀 真 理

今 井 康 子

星 加 鷹 彦

田 代 民 子

青 木 朋 子

田 岡 千 章

えとう樹里



伐られたる樹の大きさの冬青空

知らぬ町歩くやすけさ金鳳花

囀のいよいよ高き雨後の朝

落ちてなほ色の濃くなる紅椿

初芝居帯をつぶさぬやうに座す

梅東風や連絡船の水脈長し

箱階段こはこは上がる雛の家

五輪咲きはや始まりぬ花の宴

鶯の声を真似つつ山下る

ひとつ足し母に供ふる年の豆

春夕焼ひとり暮しの米を磨ぐ

吉田悦子

児玉充代

むつみ蓮

岩下きぬ代

後藤園子

岡村尚子

三井所美智子

佐藤和弘

立花一枝

林徹也

田代貞香

空 作品評

柴田佐知子

水を得て自由となれる流し雛

高倉和子

雛流しは三月三日に行う風習。へ流し雛堰落つるとき立ちにけり 鈴木花蓑など多くの優れた写生句がある。さて掲句、写生句とは一線を画しているように見えるが、作者は写生を通してその奥の本質へ迫ろうとして得た句だと思ふ。流し雛は人の罪や穢れを負わされる形代の古意をとどめる。雛から見ると人間とはなんとも自分勝手である。小さな身に穢れや災いを負わされ、儂く健気な雛は流されるのである。ところがそこから先の和子さんの思念が作品となつているのだ。流し雛の本意をふまえているからこそへ水を得て自由となりし」という急展開の発想が生まれたのだと思ふ。雛は水に置かれるや、人間の思惑など放り出して嬉々として水に乗つて遠ざかつてゆくのである。作者が雛の形代となつて詠んだような作品だ。対象をじっくりと見て感じて自分の内に落とし込み、心を込めて詠めば、俳句の世界はどこまでも広くなる。自由自在だ。

曲名と同じ苗札ハミングス

中田みなみ

〈苗札〉は春の季語。どんな名が記されていたのかわりたくなる。たぶん誰でも知っている春の喜びに満ちた曲だろう。中七でボンと切れ、へハミングスと続くのだから驚く。ささやかな景が作者の琴線に触れると、リズム感のあるいきいきとした作品となるのだ。みなみさんらしい若々しく明るい作品である。

春の靴スキップするかに飾らるる 岸 洋子

街の春はショーウィンドーからやつてくる。秋冬物の落ち着いたダークな色は入れ替えられ、たちまち明るく華やいた春の街に変わる。靴とスキップとは近い関係であるが、この靴は動いてはいないのがいい。へスキップするかに飾らるるに春の気分が横溢する。巧みな表現である。

みなみさん、洋子さんは「空」の重鎮である。年を重ねられるごとに、一層のびやかな句を作られてゆかれる姿勢に、私は多くを学ばせてもらっている。

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

楽章のごと蝶湧ける青菜畑

明日は鋤くげんげ畑に坐りをり

夕焼や手足の痛み使徒の像

遙かまで続く向日葵後向き

寺の子の誰にも抱かれ桃の花

福岡 岸 洋子

春の靴スキップするかに飾らるる

眼薬をさし北窓を開きけり

息はづませ土筆一本持ちくれし

水鳥の水引きずつて翔ちにけり

後手を組めば年寄るさくらかな

北九州 深川淑枝

にはとりに鱗の脚や春隣

負鶏の籠風呂敷に包まるる

日脚伸びまだ種こぼす草箒

霜のたび縮み菜の襞深くなる

俎板の傷また濡れて山眠る

風ばかりなる夕景や土筆煮る

福岡 高倉和子

鷹鳩と化し人間に近づきぬ

思ひ出せぬ名前のやうに春愁

京言葉つぶやきさうな雛かな

水を得て自由となれる流し雛

湯を沸かす薬缶でこぼこ春祭

戻りたき場所へと漕いで半仙戯

恋の猫縁の下にて争へり

啓蟄や褒められて持つ裁ち鋏

東京 中田みなみ

曲名と同じ苗札ハミングス